

特集にあたって

続・地域関連コレクション

—中東・アフリカ・ラテンアメリカ—

中東・北アフリカ

アフリカ

ラテンアメリカ

高橋宗生・澤田裕子

情報技術の発展により情報媒体が多様化するなか、地域研究に本当に役立つコレクションはどこに存在し、どのように入手すべきか。本特集では、このような視点に立ち、二〇〇七年三月号図書館特集「アジア地域関連コレクション」

わが国主要図書館の所蔵資料から」の続編として非アジア地域関連コレクションを取り上げた。

前回は日本国内の図書館が持つコレクションを対象にしたが、地理的に日本から遠い非アジア地域関連資料を考えた場合、当該地域や旧宗主国の機関に、より貴重なコレクションがあると推測された。そのため、国内だけでなく海外に存在するコレクションも視野に入れ、冊子体、マイクロ資料、

CD-ROM、DVD、デジタルアーカイブ、機関リポジトリ等の形態を問わず、それらの特質と利用方法について国内外で活躍する研究者やライブラリアンに執筆してもらった。

本特集で紹介した図書館、公文書館などが所蔵するコレクションは、広大な領土を持ち、全体で二〇億に迫る人口を擁する中東、アフリカ、ラテンアメリカの三地域に存在する資料のほんのわずかな部分を占めるに過ぎない。しかし、集まった原稿に目を通し、あらためてその多様性、重要性、そして豊かさを知ることになった。

それでは早速、それぞれの原稿を紹介していくことにする。

まず、中東関連では四本が収録されている。

東長稿を読むと、日本最大のアラビア語書籍を所蔵する京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究資料には、国内の機関では最も豊富なイスラーム関連書籍が揃っていることがわかる。同機関はアラビア語資料のみならず、他の現地語資料もOPAC上に公開し、インター・ライブラリー・ローン(ILRL)による外部への貸出も行っている。海外の図書館では、オスマン帝国時代の写本がすべて電子化され、過去と比べて閲覧と入手が劇的に便利になったことが指摘されている。

高橋稿はアジア経済研究所図書館が所蔵する中東・北アフリカ関連コレクションを和書・欧米語、現地語図書、統計資料、官報・法令集の四つの範疇に分けて解説している。日本語を除くアジア・アフリカの言語で書かれた図書のなかで、アラビア語図書は中国語、韓国語に次いで多い。そのなかでも貴重な図書、雑誌、マイクロ資料が紹介されている。一万冊を越える統計資料については国別の冊数が示され、各国別収集状況と電子化への移行状況を解説してい

る。

青山稿は東京外国語大学附属図書館の蔵書のなかから、中東・北アフリカ地域で使用される諸言語で書かれた図書の所蔵状況を概説し、アラビア語蔵書の特徴を紹介する。同図書館では文学、思想史、宗教学、言語学、近現代史、地域研究など、専攻を異にする教員や研究者が選書作業の中心となり、多様性に富んだアラビア語の蔵書を構築してきたと指摘している。

阿部稿は首都圏を中心に、国内六図書館が所蔵するペルシャ語コレクションの特質を解説している。イランの図書館・文書館のなかからは、議会図書館歴史文書センター、国立公文書館の電子化の現状が紹介されている。同国における雑誌や図書の急速な電子化を背景に、特にイランの近・現代史研究においては、紙媒体の書籍と電子化された情報の両方を組み合わせることが必要と主張する。また、日本人イラン研究者が持つ個人蔵書の豊富さを指摘し、これらを公開した私設図書館の可能性を示唆している。

つぎにアフリカ関連資料をみていくことにする。
佐藤稿は旧フランス領西アフリ

力諸国のなかから、セネガル国立公文書館を取り上げている。セネガルは西アフリカの旧フランス植民地全体を統括する総督府の所在地であったため、植民地経営に関わる第一級の文書が収められているという。しかし、まだ電子化は進んでおらず、利用するには現地に赴く必要がある。その文書の特徴、利用方法、資料目録について、著者の体験を交えながら解説がなされている。

オタリ稿は東アフリカ随一の規模と蔵書数を誇るケニア国立ナイロビ大学図書館の資料と利用方法について解説している。同館では、四万五〇〇〇以上の電子ジャーナルと一〇〇〇以上の電子書籍にアクセスが可能になっている。しかし近年、大学生数が増え、図書館の収容能力が追いつかない状況が見られる一方、最新の書籍を買う資金が不足しているため、大学教員の図書館利用率が低下していることにも触れている。

望月稿は二〇〇六年に「ライブラリー・オブ・ザ・イヤー」を受賞した北欧アフリカ研究所図書館が所蔵するアフリカ関連資料の特色や利用方法を解説する。限られた人員で同図書館がいかに電子化

を進め、様々なサービスを提供し、図書館間協力を促進してきたかが語られている。予算圧縮のなか、機関リポジトリ構築を目指す過程において、アフリカ諸国の大学や研究機関とのパートナーシップ実現に期待を寄せている。

吉田稿はインド系ウガンダ人の軌跡を追う研究活動のなかで、史料探しで利用したマケレレ大学図書館、ウガンダ協会図書館、ロンドンの大英図書館などの資料を解説している。

最後にラテンアメリカ関連コレクションをみていきたい。

ラテンアメリカ関連資料ではアメリカが世界一充実したコレクションを持つっており、村井稿はそのなかから米国議会図書館や主要な大学図書館を紹介している。同国は図書館間ネットワークも発達しているため、国際ILLを通して海外機関への資料貸借や文献複写サービスも提供している。つぎに日本国内に目を向け、主要なラテンアメリカ専門図書館が所蔵する資料の概要と特質を解説している。

田中稿はキューバの貿易統計と外交文書の利用方法について、自らの体験をもとにレポートしてい

る。まず、キューバ輸出促進センターが所蔵する同国の貿易統計の変化と歴史的背景を解説し、続いて、キューバ国立公文書館が所蔵する日本・キューバ関係に関する二点の貴重文書を紹介している。

ボリビアの現地研究者が書いた優れた研究書や論文を探すには、ボリビア各地に点在する研究機関の図書館を訪問する必要がある。岡田稿はハビエル・アルボ基金図書館、ボリビア多領域研究センター等、国内七図書館が所蔵する資料の特質について解説している。

国立国会図書館憲政資料室は、私文書、公文書などの文書類を専門的に扱っている。それらの文書は「憲政資料」「日本占領関係資料」「日系移民関係資料」の三つの資料群に分けられている。眞子稿はそのなかから日系移民関係資料を取り上げ、収集の背景と文書の内容を解説する。文書はラテンアメリカ七カ国とアメリカ、カナダ、ハワイという国、地域に加えて旧蔵者・旧蔵機関ごとにまとめられている。また、同資料室は録音資料も所蔵しており、憲政資料室内で試聴が可能である。

アルゼンチンのペロンおよびペ

ロニズム研究は、同国の戦後史や政治研究の中心に位置づけられているという。宇佐見稿はその関連資料が利用できる図書館や研究所を紹介している。

情報技術の進展に伴い、ここに挙げた地域関連コレクションを概観するだけでも研究環境に生じている変化が窺える。従来の冊子体資料を電子テキストやイメージに置き換えることは、資料へのアクセスを向上させる一方で、地域研究にどのような影響を及ぼしているのだろうか。電子化に起因する問題についての考察は今後の課題としたい。

国内外での利用に役立つ情報が多数掲載された本特集は、分野を同じくする研究者のガイドの役割も果たしているといえる。また、各図書館のURL等を収録した箇所もあるので、是非アクセスしていただければと思う。

(たかはし むねお、さわだ ゆうこ／アジア経済研究所図書館)